

# SHOW HEY シネマルーム



## Data

監督：エリック・ヴァン・ローイ  
出演：ケーン・デ・ボーウ/フィリップ・ペテルス/マティアス・スクナールツ/ブルーノ・ファンデン・ブロッケ/ケーン・デ・グラウヴェ/ヴェルル・バーテンス/ティン・レイマー/アン・ミレル/ヴィーネ・ディエリックス/シャルロッテ・ファンデルメールシュ/マイケ・カフメイエル/マリエ・ヴィンク

## 👁️👁️ みどころ

『キサラギ』(07年)が5人の男による怒濤の推理の面白さなら、「情事部屋」の美しい女の死体を前に集まった5人の男たちの怒濤の推理の緊迫感は？ 不倫願望は万国共通(?)だが、5人の妻たちの監視の目は？

2人のキーウーマンがストーリー形成に大きな役割を果たすが、「共有」についての男たちの理解の違いとキャラの違いが、次第に問題を大きくしていくことに。もちろん、あっと驚く展開は、あなた自身の目でしっかりと。

\* \* \* \* \*

## 『キサラギ』も5人、『ロフト』も5人の男が主役だが

グラビアアイドル如月ミキの自殺(他殺?)をめぐる一周忌追悼会に集まった5人の個性的な男たちによる「怒濤の推理」が娯楽性とミステリー性を兼ね備え、メチャ面白い作品に仕上がっていたのが『キサラギ』(07年)だった(『シネマルーム13』61頁参照)

それに対して本作は、大きなベッドの上で右手に手錠をかけられたまま、左手首を切られてベッドを血に染め、美しい背中を見せながら突っ伏して死亡している女の姿がまず衝撃的。そんな女の死体を前に、5人の個性的な男たちが『キサラギ』と同じように怒濤の推理をくり広げていくのが、ベルギー製『キサラギ』ともいうべき本作だ。

『キサラギ』の場合は5人の男たちの顔と名前がすぐに一致するから話がわかりやすいが、『ロフト』の場合は5人の男たちの名前と職業、キャラを頭に入れるのがまず大変。さらに、5人の男たちを個別に取り調べる女性警官(サラ・デ・ルー)と年配の刑事(ディルク・ローフトホーフト)が登場するうえ、5人の男たちそれぞれのこれまた個性的な妻

たちが登場するから、話はさらにややこしい。

『キサラギ』も5人の男、『ロフト』も5人の男がメインだが、『ロフト』の場合は5人の男のキャラとその妻たちのキャラの整理がまず不可欠だ。

## ビンセントの提案、それは情事部屋の共有！

冒頭の警察での尋問風景、そして女の死体を前にした5人の男たちの焦燥感が紹介された後、シークエンスは1年前の竣工パーティーに移っていく。

建築家ビンセント・スティーブンス（フィリップ・ペーテルス）が設計したマンションの竣工パーティーにはたくさんの人が集まっていたが、社交的で万事自信満々のビンセントから秘かに最上階のロフトに案内されたのは4人の友人たち。ビンセントの提案は、このロフトを5人の男たちが共有し、誰にも知られることなく自由に使うこと。そのココロは女の連れ込み自由、浮気専用の情事部屋ということだ。男はこんな甘い話には弱いもの。さて、ビンセントの提案を受けた4人の男たちの反応は？

## 5人の男たちは？その妻たちは？

ビンセントの親友の第1は、精神科医のクリス・ファン・オートリブ（ケーン・デ・ボーウ）。彼は責任感が強く人当たりの良い、頼りがいのある常識人だが、妻エレン（アン・ミレル）との関係は冷えきっていた。またエレンも、何かとクリスに対して疑心暗鬼になっていたから、クリスにとってビンセントの提案は渡りに舟？第2は、病気の妻エルジー（ヴィーネ・ディエリクス）を愛し、物静かで女たらしというにはほど遠いルク・セイナーヴェ（ブルーノ・ファンデン・ブロッケ）。エルジーは糖尿病を持病に持ち、夫のルクに心配させていることを気にかけていたが、エルジーが常用していたインスリンが映画後半のストーリー形成の大きなポイントになろうとは？

第3はマルニクス・ローレイズ（ケーン・デ・グララヴェ）。彼は酒飲みで饒舌そして女に目がないから、みんなが集まった席でついロフトの話をしちゃべりそうになったりするから大変。こんなおしゃべりがいると、5人だけの秘密のルールの厳守も大変だ。その妻ミリアム（マイケ・カフメイエル）は夫と同様おしゃべりが過ぎるところが玉にキズだが、悪気はないよう。

そして第4は、クリスの腹違いの弟で若さゆえの乱暴さを持つフィリップ・ウィレムス（マティアス・スクナルツ）。フィリップは独身主義を貫いていたが、ある日市長（ジョン・ベルヴォーツ）とも親しいレートヴィヒ・ティベルグヘイン（ヤン・デクレール）の娘ビッキー（シャルロッテ・ファンデルメルシュ）との逆玉結婚に大成功。当初はアツアツ状態を維持していたが、変態気味のフィリップはつい先日ロフトに連れ込んだ女とレイプ騒ぎを起こしたばかり。ここにも厳密なルールを守れないヤバい男がいるから、ロフトの使用は荒れ模様？

## さらに、2人のキーウーマンと2人のキーマンが

ビンセントを含む5人の男たちは今、女の死体を前に落ち着いて策を練ろうとしていたが、まずベッドを血だらけにした美しい背中の女は一体誰？そして、この女を殺したのは一体誰？そんな検討をするについて、キーウーマンとなる女性が本作ではさらに2人登場する。一人は、クリスがパーティーの席で知り合って会話を交わし、その後徐々に謎めいた存在感が増してきているアン・マライ（ヴェルル・バーテンス）。アンは市長の個人的な助手と名乗っているが、どうも市長の愛人も兼ねているよう。さて、その真相は？もう一人のキーウーマンは、ビンセントがルクとマルニクスと共にドイツの見本市に赴いた時、怪しげなバーで出会い一夜をともした女サラ・デルポルテ（マリエ・ヴィンク）。女遊びに長けたビンセントは、羨ましそうに2人の恋の進展を見守るルクを尻目にサラとの激しい夜を楽しみ、またマルニクスも一夜限りのお楽しみをもったようだが、そのお楽しみの延長は？

他方、観客がビンセントらとともにビックリするのは、ドイツの怪しげなバーに市長が助手兼愛人のアンを連れて登場したこと。さらに、なぜか市長と親しいフィリップの妻となったビッキーの父親ルートヴィヒも登場した。こりゃ一体ナニ？

話を現場に戻すと、「現場を動かすな」、「死体に触るな」の声を無視して女の顔を上げてみると、この美しい背中の死体は何とあのサラ。すると犯人は？こんな2人のキーウーマンと2人のキーマンは、映画後半5人の怒濤の推理が展開される中、どんな役割を？

## ベルギー映画らしく（？）エッチシーンは控えめに

本作のチラシでパッと目につくのは女の死体の美しい背中だから、私を含む男性諸氏は本作にかなりのエッチシーンを期待したはず。もちろん、映画の中ではビンセントとサラのプール中でのエッチシーンもあるし、実はDVDですべて盗撮されていたという、あの大きなベッドの上でいやというほど展開されたはずのエッチシーンもチラチラと見せてくれるが、全体としてそれはほんのわずか。ハリウッド映画ならそこあたりのサービス心が旺盛だが、パンフレットの中でハリウッド映画のものすごいスピード感とダイナミズムが好きだと告白しているエリク・ヴァン・ロイ監督はベルギー生まれだけに、少し上品？

したがって、過激なエッチシーンを期待した人は少し裏切られるかもしれないが、ベルギーの人口1040万人のうち110万人が劇場で観たという本作の本来の面白さは、『キサラギ』と同じく怒濤の推理。それをここに書くことはできないので、二転三転そして四転五転していく犯人捜しのストーリーと想像を絶するあれこれの意外な展開は、あなた自身の目でしっかりと。

## 共有における使用ルールづくりは難しい

日本では1950年代後半からさかんに建てられ始めたマンションをめぐって1962年に区分所有法が制定された。また1995年1月17日の阪神・淡路大震災によって倒壊したマンションの建替えをめぐって2002年にマンション建替え円滑化法が制定されたが、平面的な共有以上に立体的な共有（区分所有権）とその中での使用ルールづくりは難しい。マンションの規模が高層化し、数棟でのマンションによる団地化が進むとそのルールは更に難しくなる。マンション建替え円滑化法が、建物の朽廃という客観的要件をすべて排除して、4/5という単純多数決だけでマンション建替え決議をすることができることとしたのは、阪神・淡路大震災後の建替え決議をめぐる住民同士の争いに学んだものだ。

ピンセントが親友の4人との共有によってロフトを自由に使えるようにしようと提案したのは、一人では経済的にムリという理由ではなく、純粹に女をめぐる楽しみを男たち共通のテーマにしたかったからだ。今はリゾートマンションでも、一口いくらで購入すると年間何泊かは確保できるというスタイルの運営が主流となっているが、5人でロフトを情事部屋として自由に使うためのルールづくりは、ピンセントが気楽に言っているほど簡単ではないはずだ。たとえば、ピンセントのように女にモテる男が何日間もゴールデンタイムを独り占めしたら、ルクのように女にモテない男から文句が出るのは必至？

弁護士の私には、一見固い絆で結ばれた親友同士と思われる5人の男たちによるロフトの共有とその使用ルールをめぐる認識の差が次第に顕著になってくるところが面白い。たとえば、ルクによる盗撮カメラの設置と盗撮の実行は重大なルール違反だが、結果的にはそれによって犯人捜しがスムーズになったわけだから結果オーライ？また、情事部屋の共有は秘密がキーワードだが、それは犯人捜しに不可欠な情報の公開性とは正反対。死体となって5人の目の前に横たわっている女サラは、いつピンセントがロフトに連れ込んだの？そしていつエッチし、いつまでここにいたの？本作の怒濤の推理はスリルとサスペンスに富むとともに、人間の(男の)本性がトコトン赤裸々にされるシリアスなドラマだが、法的視点で論点を整理すれば、共有における使用のルールづくりが不十分だったことが大問題？

2010(平成22)年1月12日記